



八千代市郷土歴史研究会
 会長 村田一男
 事務局 八千代市勝田台3-24-10 牧野方



賀春 2003年
本年もよろしくお祈りします



お知らせ

平成15年1月5日(日)
 深川七福神巡りと史跡を訪ねて

2月16日(日)午前9時
製本実習教室
 市郷土博物館にて

「通信」バックナンバーをきれいに製本し、個人用と寄贈用の合冊本を作ります。自分史製作にも役立ちます。

2月16日(日)
例会(古文書などの学習)
 市郷土博物館にて午後1時より

3月9日(日)
拡大役員会(どなたでもどうぞ)
 市郷土博物館にて午後1時より

3月22 23日
 会発足30周年記念行事
東・西金砂神社大祭見学会

72年に一度の大祭を、現地に近い旅館に泊まり、貸切バスで見学先着20名で締め切ります

集合: 勝田台北口午前6時45分
会費: 3万円(うち1万円を予約時にお納めください)

P4の「東西金砂神社大祭礼に行こう」をお読みください

15年度定期総会の御案内
 4月20日(日) 午後1時より
 市郷土博物館にて

欠席される方は、委任状を事務局までお送りください

活動報告

八千代市民文化祭
郷土史展
 盛況のうちに終了しました



功労賞賞状を持って記念撮影

11月23日(土)午後1時~5時
 24日(日)午前9時~午後4時
 勝田台文化プラザ 2階展示室

参加者数
 23日: お客様70人*・会員31人
 24日: お客様85人*・会員23人
 合計 延べ209人
 *うちアンケートご記名の方: 計100人

郷土史展プログラム

テーマ:「高津新田」(現八千代台)の昔と今

- (1)プロローグ(村田会長挨拶)
- (2)古地図
- (3)八千代市全体図
- (4)八千代市都市計画基本図
- (5)地図に見る高津新田の変遷
- (6)高津新田の古道
けみ川みちと周辺の建造物
寺社と記念碑
- (7)現在の街づくり
- (8)軍用地となった高津新田その後
- (9)古文書・石造物に出てくる屋号一覧
- (10)八千代台周辺の昔と今
- (11)野馬除土手の変遷と土手跡を探る
- (12)石造物調査
- (13)諏訪神社の富士塚
- (14)高津新田字譯繪圖
- (15)今に伝わる高津新田の民俗行事
- (16)会の活動スナップ・活動日誌



10月27日(日)

歴史散歩

「旧深川大工町・江戸深川資料館をたずねて」

園田 充一

前夜の大雨も嘘のような晩秋の青空の下、10月例会として深川地区の探訪をした。

もともと、これまでに行われた道標調査の過程で、成田街道の新木戸三叉路で発見された、血流地蔵の道標(A02)の寄進者の所在地が深川大工町の刻字から、遠く離れた江戸の深川(現江東区清澄、白川周辺)からわざわざ寄進された大工町とはどのような所なのかというのが、この企画の発端である。

当日午前10時 JR 錦糸町南口に集合したのは、会員外9名を含めて総勢31名。

案内は小菅会員、サブとして板谷・関和・畠山の各氏が説明を分担した。



京葉道路を横切り江東観世音を皮切りに、堅川沿い(旧佐倉道)に四の橋から三の橋へと進む。その間田螺稲荷・撞木橋(時の鐘)などに出会う。

三の橋から三ツ目通りを南下すると、新大橋通りとの交差点角に小説やテレビでお馴染みの鬼平犯科帳の長谷川平蔵・遠山の金さんの屋敷跡とされる所があるが、標識も見当たらない。

更に南下し小名木川に架か

る大富橋を渡り、右折して堤防沿いに西へ隅田川に向かって歩く。

この辺りから小名木川に沿って舟大工が多く住んでいたため深川海辺大工町等と呼ばれた地名が点在していた。

わざわざ道標を寄進するほど活況を呈した痕跡は見当たらない。

江戸期の埋立て以前はこの辺りから南は干潟で、その先は江戸湾であったとは想像もできない変わりようである。

次は江戸時代高価な肥料として用いられた鰯の乾燥したものを取り扱った、干鰯場跡から霊巖寺へ。

霊巖寺は現在住宅地となった部分もあるようだが、往時広大な境内を有していたことが伺え墓地には松平定信(白川藩主)ら多くの大名家の墓がある。

墓地巡りをして目に付いたのは、古い墓石がいずれも黒ずんでおり、江戸期の大火や先の大戦の空襲等による猛火を浴びたためであろうか。

すぐ近くの深川江戸資料館へ到達、同館ではタイムスリップして江戸・深川の雰囲気になり昼食となる。深川といえば漁師の定食であった「あさり飯」が有名であり、本日参加者の多くの人々がこれを食べたようである。

午後はこの周辺の寺院巡りとなり、浄心寺・成等院等々その内容については小菅会員の作成した資料があるので省略する。

資料によると、江戸の町では「稲荷・伊勢家・犬のくそ」と言われた様で、実際に多くのお稲荷さんに出会った。

次に行った清澄庭園は紀伊国屋文左衛門の別邸跡と伝えられるが、現在は回遊式庭園で見学者も多い、時間の関係でざっと一周する。

松尾芭蕉に関係するものとして臨川寺には、芭蕉の木彫りの坐像がある。芭蕉翁という言葉から老人をイメージしていたが、若々しく力強い風貌であり、これでこそあの「奥の細道」が完成したのだと、認識を新にした。



その後芭蕉庵史跡展望庭園、芭蕉記念館とまわり、最後に深川神明宮に至る。

ここで、この近くで先の大戦で大空襲に遭遇し、亡くなられた方々の国の慰霊碑建立に尽力している滝氏に、当時の状況などを伺った後16時30分頃地下鉄森下駅で解散した。



本日の総行程はおよそ6km。

好天に恵まれ、落伍者も無く有意義な散歩でした。案内の皆さんお疲れ様でした。

なお、膨大な資料を自費で作成された小菅会員に感謝の意を表します。

12月22日

例会：高津新田Ⅰ家

古民家の調査

功労賞受賞祝賀会

参加者 18名

詳細は次号に掲載します

詳細は次号に掲載します

めぐりあえた二十四孝 Part.2

藤本涼輔

ぼくは中国の二十四孝に興味があります。

村上さんに、ここに中国風の彫刻があるからということで八千代市島田の大宮神社に連れて行ってもらいました。

11月2日は夕方だったので薄暗く、一週間後の日中、また村上さんと現地に行き、その結果、脇障子を新しく2面見つけ、合わせて5面を確認しました。

その5面のうち3面は羽目板で浮彫りでした。



西面に「郭巨」、背面に「唐婦人」、東面に「楊香」。

残り2面は脇障子で透彫りでした。東面に「王褒」、西面に「孟宗」。



また聞き取り調査でこれらの彫物は、明治26年(1893)のものだということもわかりました。

初めての体験だったので、とてもうれしかったです。

今村治郎橋 受難の日

畠山 隆

上高野にある今村稻荷神社の由縁については、会員の上山ひろし氏が『史談八千代』第11号に書いておられるので、おおかたはご存知と思われるが、この稲荷に合祀されたといわれる今村治郎橋(省吾)にかかわるある小さな事件について触れてみたい。

今村治郎橋は、安政年間初めの頃は佐倉藩の町同心で、9俵半2人扶持というごく小身の下級藩士であった。安政4年正月に江戸へ呼び出された治郎橋は、当時江戸幕府の筆頭老中を勤めていた藩主堀田正睦から、藩命で蝦夷地択捉(エトロフ)島探索の大役を仰せつけられる。

治郎橋は上席の藩士島田丈助、三橋清一郎ら4人と共に同年3月5日江戸を出立、奥州路を経て津軽海峡を渡り、箱館からは陸路蝦夷地北海道を横断して野付(別海町)から海を渡り国後(クナシリ)島へ。さらに国後を徒歩で北上してアトイヤからまた渡海し、択捉島最初の地、タンネモイに閏5月9日(太陽暦7月1日)に到着した。それは江戸出立から92日目のことであった。

事件というのはこの翌日、閏5月10日に起きた。といっても遠く佐倉の治郎橋の留守宅でのことである。

『佐倉藩年寄部屋日記』安政四年御用留の閏5月12日の記述によれば、概要次のとおりである。

一昨10日の夜に今村治郎橋ご内用で留守中に盗賊が忍び入り、金子43両3分3朱と懐

中物(財布)吉つ、その他状箱などが盗まれた旨家人から届出があったとある。

賊は水掛口(台所)の輪掛けの鉄鉤をはずして忍び込み、座敷にあった重ね箆の観音開き錠をあけて金子を持ち去り、状箱だけは近くに捨ててあったという。家人は就寝中でまったく気がつかず、翌朝あわてて届け出たものようだ。

それにしても43両とは大金である。9俵半2人扶持の身分の者が通常箆筒に入れておくような高ではない。蝦夷地行きの支度金とも考えられるが、それにしても多すぎるようである。藩の預り金であろうか。とすればお咎めがあるはずだが、御用留にはこれ以後なんの記事も出てこない。事の詮索はともかく、これはまぎれもなく起こった事件であった。

もちろん択捉島にいた治郎橋は知る由もないのだが、この同じ10日は治郎橋の方も大変な目に遭っていた。

彼が書き残した貴重な文書『蝦夷日記』の閏5月10日の記事を読むと、択捉島に着いた翌日、次の地に向けて出船した一行はまもなく「次第に波荒くなり引き返し候うち、大石原に吹き付けられ、船中屋形の上迄波をかむり、水主(かこ)共色を失い、<中略>すでに危うき所、タンネモイ番屋にて難船の様子見受け候土人など七、八人ならびに番人など馳せ付け、海中に入りて船の際迄参り候につき、船より直ちに飛び付き、背負われてようよう上陸、タンネモイに立ち戻る」とある。

かくしてこの日は、今村治郎橋と留守を預かる家人にとっては、水難と盗難に見舞われた大変な受難の日であった。

一生に一度、感動の
東・西金砂神社大祭礼
に行こう！

…本会創設30周年記念事業
会の未来永劫を願って…

村田 一男

2003年3月下旬、72年の時を経て「第17回東・西金砂神社大祭礼」が行われる。

平安時代の851年から72年に一度、千年以上にわたって途切れることなく続いているというこのお祭り、たいていのひとは一生に一度しかおめにかかれぬ。その大祭礼を拝観しに参りましょう。

金砂神社は水府村に東金砂神社、金砂郷町に西金砂神社とふたつある。延暦25(806)年の創建で、近江の比叡山日吉権現を金砂へ遷座する際、海路を通り日立市の水木浜から上陸したといわれる。この「金砂大祭礼」は両金砂神社が、それぞれ氏子数百人を従え、途中で祭礼と田楽を行い、水木浜へ出社し、磯に出現したとされる神を再現する「磯出」と呼ばれる神事を行うもので、出社から入社までそれぞれ7日間を要する。

前回昭和6年(1931)の際は延べ100万人以上の人出があり大変な盛況であったという。しかし、72年の時代の変化は著しく、祭礼の詳細について知るものがなく、政教分離により自治体の直接的な協力が困難になったことに加え、周辺交通や費用(1~2億円との試算)の問題など課題も多いという。また、氏子が1週間にわたる祭礼に専念する社会環境に恵まれない状況もあり、歴史に翻弄されながらも生きつづけた伝統ある大祭礼を現代社会にどう展開するかが今回の見せ場である。(この稿は『GIGA マップル 情報発信関東道路地図2002年1月、昭文社』P.77の「藪蓋街道」より加筆転載した。)

本会創設30周年記念に大祭礼を参観できることは誠に歴史的幸運である。価値ある参観にあたって、常陸山村部に伝わるダイナミックな祭礼が、地元の方がたはどのように継承されておられるか真摯に観て、神への祭典にこうべを垂れ、奉納大田楽を鑑賞し、常陸の文化を喜びまると呑み込むことに思いを馳せたい。今回(2003年)の大祭礼が

無事執り行われ後世(次回は2075年)に受け継がれるよう祈念したい。

大祭礼7日間のうち、本会が参観できるのは、西金砂神社1日目の祭典と2日目の祭典・大田楽で、もちろん東西金砂神社にも参拝し酒蔵にも寄ります。

大正7年 ドイツ兵の遠足先は
「御滝不動」だった！

わらび ゆみ



11月7日、習志野市教育委員会の星昌幸氏から「写真の場所を探しています」とのメールをいただいた。

第一次大戦時、習志野の捕虜収容所にいたドイツ兵が、遠足に行ったときの写真。写真の裏には「1918年(大正7)6月5日 捕虜生活で最初の遠足。後ろは神道の寺院と記念碑」と書いてあるとのこと。

また、この日の日記には、「3年半ぶりで初めて自由な散歩ができた！午後1時から北の方面へ、大きな村の神道の寺まで行った。そこではお金がある限り、買い物することもできた。」とあり、八千代市域ではないかとのお尋ねでした。

大正3年(1914)第一次世界大戦で日本はドイツと交戦、ドイツ租借地・青島を陥落し、約1千名のドイツ将兵が捕虜として習志野の収容所にやってきた。大正8年12月まで、彼らの捕虜暮らしが続いたが、オーケストラや劇団活動、サッカーやテニス、ドイツ体操も盛んで、周辺の日本人との交流も生んでいたとのこと。大正7年冬、スペイン風邪が流行し、習志野の収容所でも、25名の捕虜とドイツ捕虜をよく理解していた西郷所長が落命した。

ドイツ敗戦後、解放された彼らの中から、文学や美術史、外交、またソーセージ製法など食文化を伝え

日独交流に尽力した者が多数現われ、その足跡は現代にも息づいていると、星さんはその著書で紹介されている。

さっそく私は、高津観音寺、萱田の飯綱神社などを探索に行ったが、写真の石碑の揮毫者は真言系で、曹洞宗の高津観音寺ではありえず、また飯綱神社は、昔から瓦葺ではない。

新京成線寄りの北西方向かと思ったが郷土史展準備で時間がなく、結局郷土史展の当日に会員の皆様のお知恵を拝借することにした。

郷土史展2日目、村上・藤本涼輔両会員が、なんと「御滝不動」の答えをもってきた。実は、船橋市金堀の竜蔵院ではと現地に赴いたところ、お参りに来たおばあさんに「ここが屋根瓦になったのは昭和になってから」さらに「戦前のお寺はほとんどが萱葺きで、瓦を使っていたのは滝不動ぐらい」と聞き、二人で滝不動へ行ったとのこと。移築された当時の本堂と、山門の右脇の石造物群の中に移されたこのりっぱな石碑の写真も撮ってきた。

帰宅後すぐに星さんにメール。お手柄の二人に、星さんからご著書「ドイツ兵士の見たニッポン」のプレゼントのほか、「日記が予定通り冊子になりましたら、この写真のキャプションには皆様のご協力で場所が明らかになった旨、明記しておくことにいたします」とのご連絡がありました。

新会員紹介

滝口 昭二 成田市宗吾在住
村松 洋一 八千代台南在住

編集後記

季刊で発行してきたこの「郷土史研通信」も、前号で40号、今号で創刊以来10周年を迎えました。

当初は会員相互の連絡誌のつもりでしたが、学術誌や県・市史にとりあげられてもおかしくない新発見報告や初見史料の紹介記事も多く、この貴重なバックナンバーを今回製本し、図書館などに寄贈することになりました。

「めぐりあえた二十四孝」についても、県の調査で確認されている市内の二十四孝彫刻は飯綱神社の20面と熊野神社の2面だけで、藤本君が今号で報告した大宮神社の5面は、県の調査リストにない新発見です。

今後とも皆様からの報告(といっても論文集ではありませんから)気楽な投稿をお待ちしています。

2003年もよい年になりますように。
(By ゆみ sawarabi-y@nifty.com)